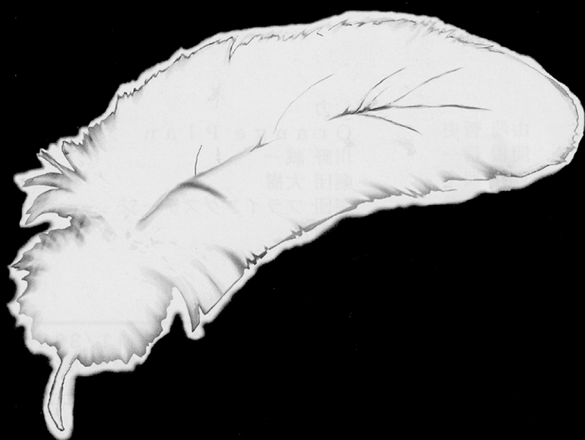


# 夜曲



作

山崎  
哲史

# 当作品の著作権について

作品の著作権・上演権は作者である山崎哲史に属します。

本戯曲の著作権保持者の事前許諾を得ることなく、戯曲の上演を行わないでください。

上演希望の方は作者へご連絡ください。

本戯曲は日本国内の著作権法及び国際条約により保護されています。

これらの法律・条約には作家がその創作に対して正当な報酬を得ることを保証し、彼らを盗作や乱用から守る役割があります。

ルール・法令に則ったご利用をお願いいたします。

人

物

男

女

場

所

男の部屋

ソファーベッドと小さな冷蔵庫

冷蔵庫の中にビールのみ数本

大きめの熱帯魚の水槽

間接照明等のムード照明

雑誌が散乱している

時

深夜過ぎ

女、男の部屋にいる。

しばらく周囲を見渡し溜息を一つつくと雑誌類を片づけ始める。

鍵を開ける音。

女、ソファアアの後ろに隠れる。

男、缶ビールを飲みながら入ってくる。

もうほとんど空だったのか、それを袖の方に投げ捨てる  
と、手に持っていたカバンを床に放り冷蔵庫からビール  
を取り出し一気に飲み干すそのまま二本目を取ってソフ  
アアに倒れ込みプルトップを開けようとする。  
後ろから手が伸びてきてそれを止める。

飲み過ぎはダメよ。

……。

男 女

女  
身体に悪いわ。

男、ビールを飲む

女  
飲むんだつたら何か食べてからにきなさいよ。その方が身体にいいんだから。仕方がない何かつくってあげるー……つて、そうだったわね。貴方の部屋の冷蔵庫、何も入ってないんだつた。男の一人暮らしつてこうなの？ それとも貴方だけがこうなのかしら？

男  
なんで……。

女  
なんでここににいるか？ あら、そんな事きまつてるじゃない。いつも通りにやってきただけよ。なにか疑問でも？

男  
なんで思い通りにならないんだよ。

女  
あきれた。まだそんな事、言ってるのね。神様でもなんでも

ないんだからそんなの当たり前でしょ。なんでも思い通りに  
なったら面白くないわよ。

くそっ……。

男

男、空き缶を袖に投げ捨てる

男

あれ以来ついてない……まったく。仕事はなんとか問題なく  
いつてるけど……ギリギリだ！ 目の前の事ごまかしてばか  
りだ！

女

余裕を持ちなさいってば。そんないつもカリカリしてたら  
い考えも浮かばないし、回りの人達だつてー

男

どいつもこいつも頼りないし……。

女

少しは歩みよつたら？ 回りを見下してても仕方ないでしょ。

男

くそっ！ 面白くないっ！

男、またビールを取り出す

女 だから、飲んでばかりなのはやめなさいってば。お酒でカロ

リーとつても意味ないのよ。

男 ええい！ 酒まで不味い！

女 だから、どうせ飲むなら美味しく飲もうよ。お酒が可愛そ  
うだよ。…いつまで無視してるの？ 聞こえてるんでしょ？

ねえ…ちよつと。

……あ？

女 機嫌悪いのは分かるけど何も無視する事ないでしょ。

……なんだ。

女 何にイライラしてるの？ ……ほらほら空腹は敵。ビールでお

なか膨らませてもダメよ。コンビニ物でもデリバリーでもい

いから何か食べようよ。ね？

男  
なにがどうしてどうなってるんだ、一体。俺が何をしたって  
いうんだ。どうしてこうも…何もかもが逆らってくる。

女  
同じ事ばかり考えてたらダメよ。他の事して、いつもと違う  
ものを見て、気分を入れ換えなきゃ。明日は休みでしょ？

どこかへ行こうよ。部屋を出て、外の空気を吸って…：…そう。  
いくらこの部屋の夜景が奇麗でも、違う景色を見なきゃあね。

男、一旦袖に消えると一冊の写真集を手に戻ってくる。

女  
あ、そーくるか

女、男が無造作にめくってる写真集を覗き込む。



女

本当に好きよねー、巨乳が。男の人ってどうしてそんなに大きな胸に弱いのかしら。大体、物には限度があるわよ。すでに「胸」じゃなくて「お尻」になつてる子もー

男、物言いたげに女の胸を見やる。

女、うらめしそうに自分の胸元を見る。

女

悪かったわよ。どうせ私は胸がありませんよーだ。

男、さらにイライラした様子でページをめくる。

別に何も見えてはいない。

女、本を取り上げる。

女

いい加減にしなさい。

男　　なんだっ！

女、男にキスをする。

悪戯気な笑み。

女　　どう？　少しは落ち着いた？

男　　な、な、なん……だ……。

女　　いつまでも無視してるからよ。あ、これ、しまってくるわね。

女、本を手に袖に消え、すぐに戻ってくる。

女　　いつも通りベッドの下に置いといたわよ。それにしてもよく

もまあ飽きずに何冊も何冊も。

男　　勝手に……漁るな。

女 だつて勝手知つたる恋人の部屋。この部屋のどこに何かがあるか、もしかしたら貴方よりもよく知っているかもしれないわね。

男 ……もう……会うはずはー

女 なかった？ 貴方はそのつもりだつたのかしら？ お生憎様。私はね、まだまだこの部屋にいっぱい未練があるの。ああ、あそこを掃除していない。あれをほつたらかしたつた。あれもしていないこれもしていないって、思いがいつぱい。そして……

女、男の顔に指を這わせる。

女 貴方にも、ね。

男 よせ。

女 まだまだ貴方と一緒にやりたい事がいっぱいあるもの。  
男 よせつたら。

男、女の手を払いのける。

女 どうしたの？ 別に怖がらなくてもいいじゃない。

男 怖がるだって？ 馬鹿な。

女 なんだか今の貴方、怖がつてるみたいだったから。何を怖がつてるの？ 私？ まさかそんな事はないものね。そうすると……。

男 お前の勘違いだ。何も怖がつてなんかいない。

女 そう？ だったらいいんだけど。……ねえ。それにしても変わり映えのない眺めよね。

男 どころが。

女 窓からの眺めも、部屋の中も。模様替えなんかしないものね。でも……そろそろ何か変化があってもいいと思うんだけど。

男 ほつとけよ。お前には関係のない事だ。

女 この部屋つて猫がいたらとつても似合うと思うわ。そう思わない？ アメリカン・ショートヘアとかどうかしら？

男 いらぬ。必要ない。

女 まあ、面倒見るのは大変だけど、貴方けっこう無頓着なもの。勝手気ままにそれぞれのペースを保てると思うわ。熱帯魚達よりよつぽど話し相手になると思うんだけど……あ、そうか。

お魚さん達が危険にさらされるのかな。……ねえ、貴方の大事ななお魚さん達は元気？

男 ……この前、二匹病気になつて片方が死んだ。それ以外は元気だ。

女 そう。あんなに大事に面倒見てたのに。私の相手もしないで

熱帯魚の世話をするくらいなのに…。

あいつらは俺が面倒見無いと死んでしまうんだ。

女 男  
あら。私だつて貴方が面倒みてくれないと困るのよ？ 物や

おもちゃじゃないんだから。

男 ……違うのか？

女 ……それつてひどいよ。

男 違うのならいらぬ。

女 女  
ひどい…ひどすぎるよ……。

女、泣き崩れる。

男 嘘泣きはやめろ。うつとうしい。

女 女  
あれ？ 分かつちやつた？

男 男  
それくらい誰でも分かる。ついでに言えばうるさいヤツもい

らない。

女 ……まったく。そういうところ、全然変わらないね。もう少し人に優しくするとか……。

男 なんだ。

女 いや、なんでつて……。

男 なんでそんな事しなきゃいけないんだ。そんな義務はない。

女 義務とかそういう事じゃ……はい、分かりました。私が悪かったですよーだ。

男 うるさい。出て行け。

女 え？ なあに？ 出て行けつて言ったの？ いいわよ。すぐにでも出ていってあげる。……私が……満足したらね。

男 ……。

女 未練たらたら女の女がこうして部屋につめかけてるんだから、少しは自分の行いに反省して、優しくしてくれも罰は当たたら

ないと思うけど？

黙れ。

嫌よ。気持ちはね、口に出してようやく伝わるって分かった

の、私。

そうか。

そうよ。やっと分かったの。だからバンバン言わせてもらう

わ。貴方の事が好き。だからそばにいるわ。

迷惑だ。出て行け。

嫌ったらイ・ヤ・で・す。

ここは俺の部屋だ。

さつきも言ったわよ？ 私が満足したら出ていくつて。貴方

に未練がなくなったら、ね。まあ、それも無さそうだけど。

……。

今の私は自分に正直なの。そう！ やっと自分に正直になれ



たのよ。貴方にもう会えないと思つたら、いてもたつてもいられなくなつたわ。気が狂うかと思つたのよ。そして気づいたらここにいた。私つてこんなに貴方の事を想つていたのね。俺は想つてない。

女 男

私は想つているの。これは「私」の気持ちなの。俺は想つていないんだ。

男 女

貴方の気持ちは聞いてないわ。

……。

女 男

そんな事より少しは身体を大事にしてよ。毎日毎日お酒ばかり飲んでるんでしょ。ちゃんと食べないとダメよ。明日は腕をふるつて料理を作るから、ちゃんと食べるのよ。

どうやってだ。

女 男

…：そうなのよね。貴方の冷蔵庫にはろくな物が無いもの。ま、貴方らしいと言えば貴方らしいんだけど、もうちよつと何か

置かないと、いざ腕をふるおうと思っても何も作れやしないわ。最低限の調味料とかさあ。

必要ない。何も食べたくないんだ。

じゃあ、勝手に料理を作るわよ。…なんなら今すぐにも作りましょうか？

なんだって？ 今……すぐ？

そう。今すぐ。

何を作るっていうんだ。

そうね。熱帯魚のフライなんてどう

かしら？

……。

骨が多いけど白身で美味しいわね。

嫌がらせか。

あら。嫌がらせだったら、この部屋中に砂糖水をブチまける

方を選ぶわ。

……。

女 男  
どちらも嫌だったら、まともな食事を取るのね。どう？ 降

参？

男 ……俺が飯を食おうと食うまいと、お前には関係ない事だ。  
女 あら、そんな事ないわよ。こう見えても結婚願望は強いから、  
料理の腕は磨いてるの。味の方は保証できるわよ？ 手料理  
を食べてくれる方が嬉しいし、どうせなら一緒に食べたいも  
の。

……食べないから安心しろ。

女 男  
あつ、そうだ！ 私、いまだに貴方の好みがよく分かってな  
いのよね。好き嫌いは……チーズがダメくらいなのは知って  
るけど……。何かリクエストはある？ 和風？ 洋風？ 中  
華？ イタリア料理は……ダメか。

男 いらなひと言つてゐるだらう？ 俺には俺の都合や身体の調子があるんだ。お前の事なんか知るか。

女 ふーん。……ねえ、アロワナつて美味しい？

男 ……脅して楽しいか？

女 別に脅してゐるワケじゃないわよ。ただ思つた事を聞いただけ。一々聞くな。

男 別にいいじゃない。聞いてへるものでもなし。

男 俺の時間がへる。

女 嫌あねえ。それじゃあその分、濃密な時間を返してあげるわ。二人でしか得られないような素敵な時間を。どう？ 悪くないでしょ？

男 じゃあ出て行け。

女 え？ なんで？

男 濃密な時間……それは俺が自分の考えに浸れる時間の事だ！

それにはお前が邪魔なんだよ！

女 二人で、って言ったでしょ？ そんな事は一人でいる時にしたらいいじゃない。

男 二人でなんかいたくないんだ！ 一人にしてくれ！

女 つれないこと。他人じゃないのにね。

男 俺とお前は縁もゆかりもない他人だ！

女 まーまーまー。袖触れ合うの多生の縁って言うじゃない。ましてや……。

男 なに顔赤らめてんだよ。

女 ねえ。

男 なにが「ねえ」だ、なにが。

女 だつてあんなに……。

男 うつとうしいヤツだな。早く消えろよ。いなくなつちまえ！

女 呼ばれて飛び出てジャジャジャジャン、じゃないんだから。

男 そう簡単に消えたりできないわよ。

女 できるだろうが！ 大人しく消えろよ！ いなくなれ！

男 何度いえば分かるのよ。貴方のそばにいたい。私は。

女 俺には、お前は、いらない。

男 私には、貴男が、いるの。

女 それはお前だけの都合だ。俺には関係ない。

男 そうよ。だから自分の都合で動くの。

女 人を巻き込むな。

男 関係ない人を巻き込んでるわけじゃないもの。

女 他人を巻き込むな。

男 貴方は当事者よ。違うとは言わせないわよ。

女 違う。

男 違わないわ。貴方と私は離れる事はできないの。そう。私が未練さっぱりなくなるまでは、ね。……まあ私の気持ちがあ

からないうちは無理でしょうね。

根本的に解決してやる…。

女 男

また馬鹿の一つ覚えみたいに繰り返すの？ それこそ貴方の大嫌いな無駄な事よ。いい加減にあきらめたら？ ほらほら、いつまでもそんなこわばった顔しないの。笑って笑って。笑う角には福きたるー、ってね。少しは人の言うこと聞きなさいな。そうしたってバチは当たらないと思うわよ。

男

聞く必要も理由もない。全くない。

女

そんなんじやあ毎日がつまらないでしょうに。世の中暗く見えるでしょ？

男

何不自由なくやっていける。

女

それは貴方が世の中と接してないからよ。自分の世界に閉じこもっているだけ。私はその殻を壊しに来たの。そ

う…：…そうだわ、そうなのよ！ 貴方を本当の意味で助ける

ためにやってきた天使。それが私よ。ああっ……なんて素晴らしいのっ！

……終わったか？

素っ気ないわねー。こういう時は拍手の一つでもするもんよ。役者でもないのに拍手をほしがるな。

ああら、女はみんな女優なのよ。

すまん。

ああら、珍しく素直。

芸人の間違いだった。

誰が笑いがほしいなんて言ったのよ。

違ったのか。

……しまいには怒るわよ。

気にするな。どちらかといえば、芸人の方が向いてると思っ

ただけだ。ヨゴレの三流芸人クン。



女　　なんですって……。

男　　君を呼ぶ舞台はない。さっさと出ていってくれないか。面白くもなんともないものを見せられるのは疲れた。

女　　どーいう意味よ。

男　　言葉、そのままの意味だ。

女　　誰がどこぞのテレビに出てるヨゴレ芸人なのよ。……私の方がよっぽど面白いものを作ってみせるわ！

女、よく分からないリアクションをする。

男　　なんだ、それは。

女　　やつぱり芸人には、お約束の一芸がいるかなーって。ほらほら、登場した時とか、ネタのオチの後とか。……あまり面白くなかった？

男 ……まあ、セクシーポーズとか言いださんだけましといった

ところだ

女 あ、そっちの方が良かったかしら？

男 その貧相な胸でか？

女 悪かったわねっ！

男 大平原の小さな胸

女 気にしてるのよ、これでもっ！ 好きで小さいワケじゃない

んだから！

男 胸がないなんて、女じゃないからな

女 貴方の巨乳好きも、そこまで言い切れればいつそ立派なもんね

男 普通、こうだ。

女 どこが普通なのよ！ 好き放題言ってくれてるけどねえ、貴

方にとって女性の胸の大ききさってどれくらいなのよ

男 Fカップ以上。

女 またワンサイズ上がってるじゃないの！

男 最近の道行くかたがたは発育が良い。

女 そーゆー事ばかりチェックしてるの。

男 健康な男なら当たり前前の事だ。

女 度が過ぎてるわよ。

男 ひがむのはいい加減よせ。

女 悪かったわねっ！ どーせアタシは……アタシは……

女、泣き崩れるが、男は無視している。

男、冷蔵庫から再びビールを取り出し開ける。

女 ……ちよつと

男 ……なんだ、まだいたのか。

女 ……慰めてよ。

男 何故だ。

女 男が泣いてるのよ。男なら優しい言葉の一つでもかけるもの  
しよ。

男 胸のない女に声をかける趣味はない。

女 ……甲斐性がない、の間違いでしょ。それとも度胸が、かし  
ら。

男 ストーカーと仲良くする義理はないと言ってるんだ。

女 誰がストーカーなのよ。

男 勝手に人のテリトリーにいるようなヤツがストーカーでなく  
て何だ。

女 深い仲でなけりや帰りを待つてたりしないわよ。

男 迷惑なんだよ。消えろ。

女 またまたそんな事言つて。分かった、照れてるんでしょ？

嬉しいうなら嬉しいって言えばいいじゃない。照れ隠しなんか

邪魔なだけよ。

全然嬉しくない。

女 本当に素直じゃないわね。いいのよ？ 自分をさらけ出して  
も。ここには私と、貴方と、二人つきりなんだから。

男 ……どうも空耳がひどい。疲れてきてるな。…いい加減、有  
休でもとるか。

女 あ、それいいわね。どこか行つてパーツと羽を伸ばそうよ。

男、飲み終わった空き缶を女に投げ当てる。

女 痛い！

男、空き缶を拾い上げ、再び投げつける。

女 痛い！ 痛いってば！ ん？ ……うふふふ。

男 今度は笑い声か。ヤバいかな、俺。

女 急に子供じみた行動とらなくなつて、ちゃんとかまってあげてるのに。甘えたいなら他の行動とれば？

男 ……入らないな。

女 ゴミ箱はあつちつ！ 全然方向が違うじゃない！

男 ゴミ箱が喋つた。

女 ご、ゴミ箱？

男 よし、今度こそ。

男、再び缶を拾おうとする。

女、慌てて缶をひつたくり、捨てる。

女 まったく、屈折した甘え方を……。

男　　なんだって？

女　別にそんな事しなくたって、ちゃんと甘えさせてあげるってば。例えば……お母さんみたいに、かな。

男　何を言ってるんだ？

女　いいの、いいの。別に私、貴方がマザコンでも嫌じゃないわよ？ どうせ男はマザコン、女はファザコンなんだから。みんな甘えたがりなのよ。

男　そんなのはお前がそう思ってるだけだ。

女　甘えられなければ淋しいでしょ？　そうでなきや人は一人でいるしかないもの。

男　……俺に。

女　ん？　何？

男　俺にとって大事なのは俺の空間が他の何者にも侵害されない事だ！　だから俺にお前はいららない！　いららないという事は

必要ないという事だ！ 必要ないという事は存在してはいけないという事だ！ だからお前はここに存在してはいけないんだ！ 分かったら消えろ！ お前が消えても俺は何一つ迷惑じゃないし困らない！ だから消えろ！ なによりも俺の為になる事はそれだけだ！

女 び、びつくりしたあ：こんなに一辺にまくし立てる事があるのね、貴方にも。またしても新しい一面を知ったわ。嬉しい人の話しを聞け！ 俺を無視するな！

女 あら、そっくりそのままその言葉、お返ししてあげるわ。私にとつて一番大切なのは私の気持ちだもの。何度言えば男つてのは分かるのかしらね。お母さん、悲しいわー。

男 誰がお母さんだ！

女 あ、怒った？え？なに？俺のお母さんはこんなじゃないって？ ごめんなさいね、こんなんで。



男　　そういう事を言ってるんじゃない！

女　　なんだか、泣いてわめいて「僕の言う事を聞けー」って。そんな感じ。

男　　俺は甘えてなんかいない。

女　　物事のカタチは一つじゃないの。私もやつと気づいたの。だから、貴方の言いたい事も少しは分かるようになったわ。

男　　だったら。

女　　言う事をきけ？　お生憎様。貴方の言う事を聞くのが、本当に貴方の為になるとは私、思えないの。だから言うわ。貴方の言う事はきけない。私が納得して、満足するまで貴方のそばを離れない。いいわよ。どこへだつてついて行ってあげる。例えばそれがトイレの中だつて、地球の裏側だつて、お月様にだつて。

男　　……。

女 ついて行くわ。

男 ……何故だ。何故そうして俺の中にならずかかと踏み行つてくるんだ！ 何故そつとしておいてくれないんだ！ 何故だ！ 貴方が好きだから。どう？素敵な答えでしょ？

女 いいんだ！ 必要ないんだ！ 俺にとつて必要ないものはいらないんだよ！

女 それで必要なものは本当に手に入ってるの？ なくしてばかりじゃないの？ 寂しくないの？

男 必要なものがあればそれでいいんだ。何も困らない。困らないんだよ！

女 そうかしら？ そうは見えないけど？

男 困つてない！

女 だからそんな風でいられるんだ。それでいいわけないでしょ。目をそむけてるだけよ。

男 なにからだ！

女 真実。

男 そんなもの、この世にあるか！

女 あるわよー。例えば…真実の、愛。

男 どこに！

女 ここに、よ。

男 触るな！

女 おー、こわ。否定するのは簡単よね。認める勇気がないだけ

男 だもの。

女 黙れ！

男 まあ、別にそんな難しい事はどうでもいいんだけどね。この

女 世は全て簡単な事ばかりなのよ。知ってた？

男 黙れと言っている！

女 オツケー。分かった。

男 だま……え？

女 ……。

男 おい。

女 なに？黙れって言ったから黙ったんだけど？

男 いや……その……。

男、何か肩すかしをくらったようにうろつく。

女、それを微笑ましく眺めている。

男 あー……あの、な……。

女 なあに？

男 あ、いや、その……あー……そう……その、だな。俺とお前

は分かり合えない。考え方も何もかも違いすぎる。

女 当たり前じゃない。他人だもの。

男 そう……他人だ……分かり合えるはずがない……だから、俺のそばにこないでくれ……。

女 なんで？

男 ……落ち着かない。理解できないものが在るのは、落ち着かない……困る。

女 そう？ 私は困らないわよ？だって面白いじゃない。

男 なんだって？

女 面白いの。何もかもが違ってる。だから面白いの。違う事を認める。でも、何故か関わりをもつ。それって面白いと思わない？ そうね、貴方風に言えば、「必要のない無駄さ加減が。この無駄さ加減がたまらないのよね。

男 分からない……分からないよ……俺には……。

女 いつか分かるわよ。それともずっと分からないかもね。

男 俺は……。

女 分かるまでもがくしかないのかもね、人間って。ねえ……いいのよ。私は貴方がどんな事をしようとも私は全部受け入れてあげるわ。

男 やめろ。

女 何をしてもいいのよ。その代わり、隠し事はなし。

男 やめろ……。

女 もちろん今までだって貴方を恨んだりしてないわよ。

男 やめろって言っ……

女 貴方が私を殺した事もね。

……！

女 だって「私」の大好きな「貴男」のやる事だもの。恨んだりするはずがないじゃない。全部ひっくるめて、貴方だもの。

女 ねえ、分からないから殺したの？

男 ……え？

女 分からないものは怖いから、のけようとしたの？

女 例えばこの部屋の天井ばかり見せられてる私。

女 ほとんど口をきかない私。

女 何も文句を言わない私。

女 あの日、貴男は……

男 やめろ……

女 バスルームで……

男 頼む！ やめてくれっ！

女 ……いいわ。やめたげる。でも良かったわね。バレなくて。

あ、何度も言ったけど勘違いしないでよ。恨んでなんかいないのよ、私。何か理由があったのよね、きつと。あ、でも、それを教えてくれないのはちよつと寂しかったかな。

男 怖かったんだ……そう……きつと、お前の言う通り……俺はお前が怖かったんだ……

女 何も言わなくていいわよ。分かっているから。

男 怖かったんだ！ 何故怖いのかも分からなかったけど、怖かったんだ！ 何も言わず俺をただ見つめているお前が怖かったんだ！

女 落ち着いて。何も言わなくていいの

男 何か白い霧の向こうで起こっているように現実感なんてなかった。気づいた時には俺は……

女 しーっ……



女、男の口に指を当てると、そつと抱きしめる。

女  
いいの。……いいのよ。

そのままソファーに連れていき座らせ、なおも抱きしめる。

男、徐々に肩を振るわせる。

女  
誰も貴方を責めないわ。いいのよ、そんなに怖がらなくて。

いいの……。

女、優しく頭を撫でる。

間

落ち着いた？

分からない。

そう……。

ね、聞いていい？

ああ。

私がいなくて寂しかった？

分からない……。

そう……。

寂しかったのかもしれない……お前の顔を見た時、ホツとし

た。そして怖くなった。

怖がる必要なんて、どこにもないのにね。

男  
そうか？

男、女を抱きしめる。

男  
そうか……そうなのか？

女  
そう。簡単な事でしょ？

男  
ああ……簡単だな……とても。

女  
とつてもシンプルなの。何もかも。私、ようやく気づいたの。  
なにもかも終わってから。でも貴方に教えたくて……やっぱ  
り迷惑だったかもしれないけど、知ってほしくて。

男  
うん……。

女  
それに、会いたかったし。変わった私を見て欲しかったし。

男  
ねえ、私、変わったかなあ？

男  
変わった。前は何一つとして言わなかった。何も分からなか

った。

女 じゃあ……今は？

男 うるさくなった。

女 なによそれ。

男 でも、少しでも何を考えてるのか分かった。そのぶん分らない事も増えた。

女 結局、そんなもんかなあ……でも、少し前進かもね。

女 ねえ。お母さんみたいになっていうのはね、暖かいつて事なの。

男 感じる？ 私のぬくもり。

女 感じる。……なんだか……落ち着く……いいのか？

男 なにが？

女 こんな風に甘えて。

男 いいんだよ……。

男　　そうか……いいのか……。

女　　「いいんだよ」って誰かに言っただけよ。ほしかったんだね、きつと。気づくのが遅かったなあ……私、「気づいて」「分かって」ばかりだったから……。それじゃダメなんだよね。うん。

女　　……ねえ。私は間に合わなかったけど、貴方は気づいてね。大事な事に。まだ遅くないよ、きつと。

男　　そうなのか？

女　　遅い事なんてきつとないよ。気づこうと思えば、きつと。

男　　……「きつと」ばかりだな。

女　　そうだね。変かな？

男　　分からない。

女　　そう……覚えててくれる？　こうやって話した事。私の事。

男　　……どうしたんだ？　急にそんな事、言っただけ。

女　もういかなきゃ。

男　どこに？どこにだよ。

女、笑って上を指さす。

女　当たり前のところに。あ、でもこっちかも。

今度は下を指さす。

女　もう満足したから。

男　俺は何も分かってないし、お前に何もしてやっていない。

女　勘違いしないで。貴方に何かしてもらうんじゃないの。私が貴方にしてあげたかったの。そして貴方は私を必要としてくれたわ。今、ほんの一瞬だったとしても、私にはそれで充分。

男　俺、お前の事、覚えていないかもしれない……話した事、忘れるかもしれない……今ここで終わったら、全部忘れてしま  
うかもしれない……それでお前はいいのか？

男、すがりつくような目で女を見る。

女　ダ・メ・よ。そこまで面倒見れないもの。

男　このままじゃダメだ。これで終わらせられない。終わらせたくない。

女　なにもかも貴方次第よ。それに……

女、男に指を突きつけて顔を寄せる。

女　終わらせたのは貴方。これ以上どうしようもできないのは貴

方のせいよ？

……。

女 男  
ねえ、覚えててね。私の事。それだけでいいから。

男 忘れちまう……俺、忘れてしま……

女 おいたはダメよ、坊や。いつまでも我が儘言わないの。子供  
じゃないんだから。

男 いてくれ……まだそばにいてくれよ……頼む……頼むから……

女 初めて私に頼み事したね。残念だわ、聞いてあげられなくて。

男、うつむいて声を押し殺しながら言う。

男 頼む……



返事がないので顔を上げると、女はもういない。

部屋にはただ一人、男がいるだけ。

周囲を捜すが、女の姿はない。

茫然としながら座り込み泣き崩れる男。

上から一枚の羽が落ちてくる。

男、それに気づいて拾い上げる。

幕